



池袋児童の村小学校研究の一視角

國枝, 裕子

(Citation)

神戸大学発達科学部研究紀要, 12(1):215-225

(Issue Date)

2004-09

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81000600>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81000600>



池袋児童の村小学校研究の一視角

國枝 裕子

A new perspective of Jidono-Mura Elementary School

Yuko KUNIEDA

1 はじめに

池袋児童の村小学校（以下、池袋児童の村と表記）は、大正新教育の「いわばクライマックス」¹⁾的な「いわゆる『自由教育』をもっとも徹底してここに実現した」²⁾学校として、わずか12年という「短命な教育ユートピア」³⁾として幕を閉じたにもかかわらず、日本教育史上に異彩を放ってきた存在である。周知のとおり、教育の世紀社によって構想されたのが池袋児童の村⁴⁾であり、機関誌『教育の世紀』であった。教育の世紀社は、野口援太郎（1868-1941）、下中弥三郎（1878-1961）、為藤五郎（1887-1941）、志垣寛（1889-1965）の同人4名によって、1923（大正12）年に結成された民間教育団体である。結成当時、野口は帝国教育会の常務理事、下中は平凡社社長、為藤は茗溪会機関紙『教育』の編集者、志垣は教育ジャーナリストとしてそれぞれ活躍していた。この2年前、原内閣が実施しようとした義務教育費削減政策に反対するために「教育擁護同盟」の運動に結集した同志が集ったのである。

よく知られているとおり、この池袋児童の村を含む日本の大正新教育運動は、多くの国で同時代に生じた類似の教育改革動向の総体の一部として理解されている。この点を考慮し、今日では「新教育運動研究にとって比較史的立場をとることが新教育の全体像を把握するためには決定的に重要」⁵⁾という立場から、アメリカ・ドイツ・イギリス等の外国教育史研究者による共同研究も行なわれている。

このような新教育運動研究の状況も鑑み、池袋児童の村が日本教育史の領域にとどまらず、同時代の国際新教育運動の中でどのような位置を占めるものであったのかという課題意識を筆者は抱いている。この課題意識の下、本稿では、教育の世紀社、池袋児童の村、およびそれらを支えた人物を対象としたこれまでの研究を検討し、今後の研究の課題と展望を探る足がかりを考察することをねらいとする。

2 民間教育史料研究会による研究

今日までの先行研究のうち、通説的位置を占めると考えられるのは民間教育史料研究会による研究成果であろう。この会が1975年にまとめた『民間教育史研究事典』では、池袋児童の村は次のように

記された⁶⁾。

〔位置〕教育の世紀社（機関誌『教育の世紀』）の実験学校。全国設置予定が実際には、東京府池袋、兵庫県芦屋（御影）、神奈川県茅ヶ崎雲雀ヶ岡の3校にとどまる。ほかに池袋より分かれた東京児童の村（目白学園）小学校がある。社は社会を細胞組織より変革していくものとして教育の力を信じ、制度上の改造変革とともに教育の方法・内容の革新運動をめざした。理念の具体化を示す「『児童の村』のプラン」にはドモラン、デグローリー、トルストイなどの世界の新教育運動の影響が指摘され、事実、国際新教育連盟の日本支部として結成された新教育協会の本部は、池袋児童の村小学校内におかれていた。しかしながら、他方、同校の組織や方法には、「村」「家」といった呼称や訓導（のち主事）野村芳兵衛の言行に代表される日本の共同体的農本主義的傾向もみられる。同校の教師たちが追求した生活主義の教育は、マルクス主義の影響をうけつつ、大正期から昭和期にかけての日本の教育改造運動の中で、大きな役割をになった。

また、教育の世紀社の機関誌『教育の世紀』については以下のように記述されている⁷⁾。

〔位置〕1923（大正12）年10月、教育の世紀社同人によって発刊され、昭和はじめにかけ続刊された同時代リベラリズムの頂点を担った教育雑誌（中略）。

〔内容〕児童の村小学校と当時活動休止中の教員組合啓明会の記事、および社同人、児童の村小学校訓導の論文、主張、実践記録、座談会記録などが主な内容。（中略）創刊号から連載の「教育の世紀社月例夜話会」の記録は、無政府主義者と理想主義者の両派が拠っていた教育の世紀社・児童の村小学校関係者のあいだの微妙な対立を示して興味深い。

この成果を発展させ、民間教育史料研究会が10年の歳月をかけてまとめたのが『教育の世紀社の総合的研究』⁸⁾（以下、『総合的研究』と表記）である⁹⁾。教育の世紀社を中心としてその周縁までをまさに「総合的」にとらえた研究として、出版から20年を迎える今日に至っても、最もまとまったものとして挙げられよう。この書の序では、「この集団（教育の世紀社—引用者註）がつくり出した学校だけがとりあげられていて、運動の全体的構造が視野にはいってはいえない¹⁰⁾」という先行研究のあり方を指摘し、その克服が目指された。そして、この『総合的研究』が据えた課題には3つがあった¹¹⁾。第一に教育の世紀社同人達がいかにして政治的・国家的側面と文化的・人間的側面を「相まってすすめるならば教育問題の解決はおぼつかないと考えるようになったのか」を同人の生育史、先行経験の分析によって明らかにすること。第二は20～30年代の人びとの「発達課題の、教育の世紀社ふうの解決の助成過程」を明らかにすること。第三は、教育の世紀社の中ではぐくまれる「生活教育とそこでの子どもへの関心のよせ方の形成史を明らかにすること」とされた。これらの課題が11名の共同研究者間で確実に共通の理解として受けとめられており、まさに「共同研究」足り得ていることは高く評価されている¹²⁾。

では次に本稿の課題意識に基づき、『総合的研究』の中で国際新教育運動との関わりをまとめた田嶋一による第5章の「教育の世紀社と国際新教育運動」¹³⁾の内容を見ておこう。ここでは特に野口と新教育連盟との関わりが指摘されている。そして、自由教育論者の野口が「欧米」の新教育運動にコミットし、生活教育派がガンジー、タゴール等の「非西歐的」思惟に範をとろうとしたというように国際新教育運動との関係に2つの流れがあったことが提示されている。後者については、下中と野村が自分たちの実験学校とトルストイの学校とを「つなげてとらえようとしていた」とされ、同時期にトルストイ、タゴール、ガンジーに関する論文が『教育の世紀』に掲載されたことが、「非西歐的な

池袋児童の村小学校研究の一視角

思想の系譜」への着目の根拠として挙げられている。

しかしながら、「欧米」の新教育運動の中でも「非西欧的」な新教育思想に注目がなされていたという当時の状況をふまえるならば¹⁴⁾、一概に「欧米」と「非西欧」という区別をつけることは困難であり、この枠組みを再検討する必要があるだろう。

3 野口援太郎に関する研究

教育の世紀社同人4名のうち、先行研究の中で最も多く取り上げられてきたのが池袋児童の村校長でもあった野口援太郎に関するものである。前掲の『総合的研究』でも、特に第1章第2節「リーダーの性格」の中で野口の生活史がまとめられている¹⁵⁾。また、第2章第1節「姫路師範学校の経営とその卒業生の生活史」¹⁶⁾では、野口が姫路師範学校長であった時期の改革が詳しく検討され、「欧米の教育から学ぶという方法で教授における自由の徹底」¹⁷⁾がなされていたことが明らかにされた。

この研究以外でも、野口は様々な角度から、またその生涯にわたって研究対象とされてきた。その中でも特に、国際新教育運動と野口との関わりがどのように論じられてきたのか、先行研究をまとめてみよう。教育の世紀社がその基本理念を表す「教育精神」を新教育連盟の「原則」を下敷きにして作成したことはよく知られているが、その新教育連盟との関わりを中心として野口と国際新教育運動との関わりは論じられてきたと見ることができる。例えば、人物史研究に客観主義的手法を用いた大井令雄『日本の「新教育」思想——野口援太郎を中心に——』¹⁸⁾では、第2章「日本新教育の考察——野口援太郎の周辺——」で、野口を天皇制ファシズムへの進行の中、最終的には節度を失ったナショナリストへの変質を遂げた教育家の一つの典型として位置づけ、新教育連盟の日本支部である新教育協会の設立などを取り上げている。ただし、「同人による集団思考に負うところが大きい」¹⁹⁾として池袋児童の村についてはほとんど触れられていない。

中野光も『大正デモクラシーと教育1920年代の教育』²⁰⁾の中で、第5章第3節の(4)を「新教育協会の結成とその役割」にあてているが、新教育連盟の日本支部として正式発足した1930年以降の活動にふれているにとどまり、野口と連盟とのそれ以前の関わりについては言及していない²¹⁾。

この点について、新教育連盟に軸を置き、詳しく論じたのが山崎洋子の研究²²⁾である。特に新教育連盟の創設者であるエンソアに関する研究について見るならば、山崎による1996年の研究まで皆無に等しい状況にあった。ボイド(William Boyd)の『世界新教育史』²³⁾やスチュアート(W. A. C. Stewart)の著作の中では、新教育連盟の創設者としてエンソアは描かれ、我が国においては、この著作を基に理解されたイギリス新教育運動の中で、または野口援太郎についての研究の中で部分的に紹介されるにとどまっていたのである。山崎の研究の中でも、野口と新教育連盟、または機関誌『教育の世紀』と連盟の英語版機関誌との関係が示唆されているが、池袋児童の村の教育理念を構想段階で明らかにするうえでも、さらに両者の関わりについての研究が必要であると考えられる。

また、野口の西洋新教育受容の実態について言及した先行研究には、主に竹田宏子「野口援太郎によるモンテッソーリ教育法の受容と実践」²⁴⁾と、橋本紀子による『男女共学制の史的的研究』²⁵⁾が挙げられよう。

竹田論文では、1914(大正3)年の欧米視察から姫路師範学校を去る1919(大正8)年までの教育の世紀社創設前の野口によるモンテッソーリ教育法の受容過程とその実践に言及している。竹田によれば、野口が園長を勤めた姫路師範学校附属城北幼稚園の活動には、「幼児の自立」という点で自由教育と早教育とを直結させ、その思想の裏づけと方法としてモンテッソーリ教育法が導入された。最も野口がわが国の教育に取り入れたかったのは、モンテッソーリが「すべての人間の勝利、すべての人間の進歩は内的力にもとづく」と絶賛した内的力への絶大なる信頼であった。そしてこの思想が、後に野口の中で「生きんとする力、伸びんとする力」に転じられていくのだと結論づける。つまり、野

口がモンテッソーリから受容したのは、規制し社会化を促す教育から、個人の能力への信頼に基づいた自己の能力を伸長させる教育への転換への視座であったと考えられている。

また、橋本論文では、野口が残した未完原稿『男女共学論』に注目し、その共学論は、イギリスの共学主張者の考えを受け入れたもので、特にジェー・エイチ・バドレー (John Haden Badley) の考えに共鳴し最も影響を受けているとしている。池袋児童の村小校長在職期の野口による西洋の新教育情報の受容の一端を解明した論文と言えよう。橋本は野口の思想形成過程について、「子ども研究の姿勢や視点を国際新教育運動から吸収し続け」²⁶⁾ たという。

しかしながら、この見解の具体的根拠や具体的な「国際新教育運動」のあり様については示されていない。同様に、宇野美恵子『教育の復権—大正自由主義教育と自己超越の契機』²⁷⁾ でも、「野口は教育研究にかんする国際的動向を日本に紹介することに極めて熱心」であったことが指摘された。しかし宇野の関心は、「日本思想の側から」²⁸⁾ 野口の教育思想を分析するという点にあったため、野口の訳書についての指摘にとどまっている。

野口の思想形成過程や教育思想を探るうえでも、より具体的に野口が新教育情報をどこから、どのように、なぜ吸収したのかを明らかにしていくことが、重要な鍵となるであろう。

4 野村芳兵衛に関する研究

では次に、野村芳兵衛に関する先行研究について概観しておこう。池袋児童の村研究では野村がその中心的人物として多く取り上げられてきた。野村に関する1950年代の研究のうち、主たる研究には海老原治善「民間教育運動の発展」²⁹⁾ や、石戸谷哲夫『日本教員史研究』がある。これらの中で野村はファシズムに妥協した「神がかり」的人物として解釈され、野村の実践は天皇制に基づくという点で限界があったという否定的評価が下された。その後、竹内常一や中野光によって野村の教育思想を「ファシズム国家権力が『国体』と『政体』とを同一視する政治の論理とは明らかに異なるものであった」との評価が新しく加えられた³⁰⁾。中野光は『大正自由教育の研究』(黎明書房、1968年)、『大正デモクラシーと教育』(新評論、1977年)、「池袋児童の村の教育」(中野光・高野源治・川口幸宏『児童の村小学校』黎明書房、1980年)といった一連の研究で池袋児童の村の展開を解明してきた。中野や後述の磯田らは、いずれも「生活教育」を構想した人物という視点にたって野村の教育思想について言及している。

1960年代後半から、従来の「新教育運動」研究を、日本の「伝統的なもの」が新教育運動を担う教師達を支えていたという視点からとらえなおす試みが始められた。野村研究に関しても、特に磯田一雄や中野光、中内敏夫らがこの視点から、一貫した「親鸞主義」に基づく教育思想であったこと³¹⁾ や、「明治以降の公教育があえて捨象してきた宗教思想への回帰と再評価の営みがあった」³²⁾ ことを示してきた。特に「大正の第一次新教育運動が欧米の新教育運動の影響をうけて発達したものであることは一般の常識だが、それが実は学校教育の『近代化』にたいする民族的教育伝統の新生の運動でも(でもというより、で)あったという側面が従来見落とされていた」³³⁾ という宮坂哲文の問題意識を受け継いだのが、磯田による研究であった。そこで磯田は野村の『生活教育論』に、デューイを始めとする『欧米の新教育』の影響を指摘することは困難ではない」と断言し、『何が』摂取されたかよりも、『どう』消化されたかを論点としている³⁴⁾。

しかし、磯田の言う『何が』摂取されたかという問題については、「欧米の新教育」の「影響をうけて」いたという指摘に留まったままで、「消化」の前提となる「摂取」されたもの、すなわち「何」については先行研究では深く追究されてこなかったと言えよう。

これをふまえ、受容された内容である「何」を明らかにするという課題意識に立脚した先行研究に、布村志保「野村芳兵衛における『自然』概念形成過程(2)」³⁵⁾ がある。この研究では、野村の「外

池袋児童の村小学校研究の一視角

的自然」への認識を明らかにしつつ、それが「ルソー理解」と関連していることを示すことが目的とされている。布村論文においては野村の著作から、「ルソー」の名が挙げられる箇所や「自然にかへれ」³⁶⁾という言葉が繰り返して使用していることを指摘し、「ルソーをはじめとした欧米の新教育の理論を取りこみ、かつ消化しながら主張していく」³⁷⁾のだと論じる。布村によれば、野村の理論は「『文明社会』の対抗原理として『自然』を対置させていたルソーの原理と重なってみえる」³⁸⁾。そのうえで、小括においては「児童の村初期における野村の教育理論やカリキュラムには、ルソーの理解が表出していた」³⁹⁾と締め括られているのである。

しかし、いくら日本においてルソーの教育思想を表すとされる「自然にかへれ」という言葉の多用や、『エミール』からの「影響」と考えられる記述があるからと言って、野村が「どのように」ルソーの思想を解釈していたのかについての言及もないままに、野村がルソーの思想を「理解」するレベルにまで至っていたと明言することには疑問を呈せざるを得ない。野村の自然観とルソー教育学における自然との類似点を指摘するものに終始し、野村が「何」に影響を受けたのかは示されなかったと言えよう。

また前掲宇野の別稿「大正自由教育における野村芳兵衛の思想——1920年代の『新教育』における『生活世界』の哲学——」では、1926年（昭和元）の野村の記述が、デューイの「環境や他者との相互作用を媒介にして成立する『経験』という概念や、現在の経験を、意味連関の獲得としての理性（理解）に連続するものととらえる概念と共通する見解」だとし、さらに「やって見つける、なつて味わう、見せあって話す」という学級経営案が、デューイで言うところの"learning by doing"による発想と「類似」しているとする説が示された⁴⁰⁾。さらに、「1920年代の欧米における教育の共通理念はどの程度野村の思想とかかわっていたのであろうか」という課題を設定し、これに対し同時代の西洋の新教育運動、主に新教育連盟主催のハイデルベルク会議で発題講演を行なったブーバーの教育論とを比較している⁴¹⁾。

この宇野論文や、今井康雄「野村芳兵衛における『教育意識』否定の論理——『教育意識』の否定から『自然の組織化』へ——」⁴²⁾には、同時代の国際新教育運動における教育の理念と野村の思想との比較という切り口が存在する。

だが、西洋の新教育との類似点を示すだけではなく、それがどのように野村の実践に反映されていたのかをより具体的に実証することが必要であろう。このことは国際新教育運動における児童の村の位置づけという、より大きな課題につながっていくものと考えられる。

その他、近年の池袋児童の村研究に新しい視座をもたらしただけのものとしては、実践記録の語り口に注目した浅井幸子「野村芳兵衛の一人称の語りとその変容——実践記録の記述を中心に——」⁴³⁾が挙げられる。これは、「『教師—児童』の関係を懐疑する野村の内的葛藤と、子どもとの『私—あなた』の関係と呼びうる具体的な関係の成立、変容の過程を、野村の有り様を表現し構成していた一人称の語りの変化を焦点として検討すること」を主題とした論文である。ここでは、野村の教育実験が「『私』という一人称の語りと子どもの存在の固有性を析出する所から、具体的な出来事そのものにおける教育の関係と意味を問い直し再構築する試みであった」という興味深い考察が行なわれた。

つづいて浅井は、「教育の世紀社による『児童の村』構想の成立過程——教育擁護同盟の運動を中心に——」⁴⁴⁾で、先の論文をふまえ、「教育擁護同盟から教育の世紀社へと展開されたメディア運動の過程を、運動の様式と教育言説の変容に着目して描出し、『児童の村』の構想の特徴を検討」した。ここでは「同人による『児童の村』構想がメディアにおいて膨張した語り口によって成立していたのに対し、『池袋児童の村』の教師たちの実践の十発点は、……『私』の内面へと向かう小さな語り口によって特徴づけられている」とし、両者の「断絶は重要」であるとの見方を示した。この点に関して、民間教育史料研究会『総合的研究』のメンバーでもあった清水康幸は次のように論評している⁴⁵⁾。

著者は社同人と野村芳兵衛ら児童の村教師たちの違いを、「膨張した語り口」「小さな語り口」という言葉で対照的に表現し、両者の「断絶」を強調している。しかし従来の研究では両者の関係はむしろ連続性や発展性の見地から分析されている。「語り口」は発想の違いを示すものではあっても、ただちに理念や思想における「断絶」を意味するとはいえない。そもそも著者は、社同人たちを一括りにしている。しかし、同人たちは一枚岩どころか、その教育観・学校観において深刻な矛盾・対立を抱えこんでいた。

別の論稿で多田建次・多田廣子は、「野口と野村との路線上の対立を明確に指摘した記録は見当たらない」ことを認めながらも、野口が児童の村訓導として呼び寄せた田中、土井、鷲尾といった姫路師範の教え子たちを「野口の代弁者」として捉え、野村と教え子たちの相克は否定しえないため、野村と野口との関係も「互に違和感をいだきあってきたとみて大過あるまい」としている⁴⁶⁾。ここにはいわゆる野口を含めた姫路師範卒の「自由教育派」と、野村を中心とする「生活教育派」の対立構造が打ち出されている。しかし、先の清水の言及をふまえるならば、同人たちと教師たちとの個々のつながりや関係を実証的に解明していくことで、両者の関係性はより深く分析されるべきであり、この対立図式についても再検討が必要である。

5 実践を対象とした研究

近年の池袋児童の村研究動向に注目した場合、「教育実践」を対象とするものが増加しつつあることがわかる。この動向についても以下追っておきたい。駒込武「野村芳兵衛による「修身教育」の実践——社会認識と共感の形成をめぐる——」⁴⁷⁾では、雑誌『小学校』に寄せられた「分業の授業」と名づけた野村の実践記録を分析し、従来の「自由主義者」⁴⁸⁾・「アナーキスト」⁴⁹⁾といった野村への評価を「野村による実践の総体的な営為を矮小化するもの」だと否定し、野村の修身教育実践を「実践原理の確かさと実践的展開の豊かさにおいて戦前期の教育運動の最も高い到達点の一つ」だと評した。駒込論文では、従来の野村を対象とする研究に共通の傾向として、第一に「専らその教育思想に焦点をあて教育実践を具体的に問題にしていないこと」、第二に「研究対象が生活指導論と生活綴方論に偏っていること」の2点が指摘されており、それらが以下のような課題意識に基づくものであったことは注目すべきであろう⁵⁰⁾。

言うまでもなく、「教育実践」は教師の教育思想がそのまま反映する場ではない。それは制度としての学校の管理運営体制及び（教科教育の場合は）教科書による内容的規制との拮抗関係の中で思想が実現する——或は実現しない——場である。しかも、そこには重要な構成要素として「他者」としての子供が存在する。子供とのダイアログとして展開される実践には必ずしもモノログとしての思想が包摂されえない豊かな可能性——或は困難——が存在する。教師の実践原理と言うべきものはこうした条件の中での試行錯誤に基づいて形成されるのであり、それを把握するためには実践のプロセスに目を向けなくてはならない。

駒込論文をはじめ、1993年に狩野浩二「『生活』と学習の結合に関する教育実践の研究——野村芳兵衛の実践を中心に——」⁵¹⁾、1998年に君塚仁彦「池袋児童の村小学校における「学校博物館」活動——博物館学の視点から見たその意義——」⁵²⁾、2000年に谷口雅子「戦前日本における教育実践史研究 IVの2——社会認識教育を中心として（私立児童の村小学校における実践）——」⁵³⁾、2002年に富村誠「生活科「遊び」活動論の歴史的研究(V)——明治後期「遊戯」活動論の大正新教育期・小学校における実践化(1)——」⁵⁴⁾、水崎富美「野村芳兵衛の「訓練」と教科外活動の実際——教育課程

池袋児童の村小学校研究の一視角

づくりへの子ども参加と相互評価——」⁵⁵⁾が発表されている。

狩野論文では従来の思想研究への偏りを批判し、「教師の思想がすべて教育実践に結びつくわけではないし、また、言説は、しばしば理想や夢のみを説いて、現実から目をそらし、必ずしも実際の仕事を正確に伝えているとはかぎらない」と「実践」に迫る必要性を説く。さらに前掲の駒込論文の指摘を受けて、狩野は「教育実践そのものをどう理解するのかが問題である。これまでの野村研究の多くが、教師の実践とは何か、という問いを無視して、野村の言説をたよりに彼を思想家として理解してきていることに問題の源がある」とし、「実際に野村がおこなっていた教育実践—仕事—を再構成していくこと」を課題としていた。

谷口論文も同じく、「子どもの姿、教育組織等について」の叙述に終始している従来の研究から「できる限り授業のレベルで論を展開する」研究への脱却を目指している。

また、君塚論文は「博物館学の視点」を据えた論文として、上記の論文の中でやや趣を異にするものであるが、活動実態についての考察を試みているものであり、やはり教育活動の実践をとらえようとする研究の一つに位置づけられよう。

君塚論文と同じく池袋児童の村の教科外活動を研究対象とした水崎論文では、野村の理論と実践について教科外の領域を扱ったこれまでの研究が、「実践の詳細について、『夏の学校』や運動会、遠足等を野村の『訓練』の思想形成と方法の意識化を含めて検討されたものではない」とし、「まず野村が『訓練』の認識と教科外をどう組織しようとしたのかについて、理論的な次元を野村の著作を中心として示し、その後、『夏の学校』、運動会、遠足についての実際を考察」⁵⁶⁾するという手順がとられた。そこで水崎は、池袋児童の村の実際の活動について子どもが作成した史料をもとに検討を行なっている。

しかしながら、これら「実践」を対象とする研究の分析は、実践を伝える資(史)料の少なさも手伝い、結局は従来の研究と同じく野村の思想が現れた著作等に還元した分析となり、授業の実際に迫るものとは言い難いものとなっているものもある。「教師としては、実際の授業がどうであったかという点で、その言説と実践を捉えることができる。もっとも実践を取り上げようとしても、その資料が当人の報告である以上、授業の実際はあくまでもそうであったろうというレベルのものでしかない」⁵⁷⁾という谷口論文での言及もある。「実践」を読み解くことに附随する困難さがここに浮かび上がる。

6 おわりに

以上、教育の世紀社、池袋児童の村、またそれらを支えた人物を対象とした研究を、特に国際新教育運動との関わりという視点から検討してきた。1980年の館かおるによる「児童の村小学校研究を進めるにあたっては、こうした概念や実践の形式が、何故うみだされたのかを問題にせねばならないであろう。そうした時、国際新教育運動の影響とともに、近代以前の日本社会が持っていた、『村』の教育思想や教育体系とのつながりを検討することが重要である」⁵⁸⁾という指摘からもうかがえるように、池袋児童の村研究においては「国際新教育運動の影響」があったという指摘が通説となり、その後、日本の「伝統的なもの」からの影響についての考察がなされてきた。

しかしながら、野口を含む教育の世紀社同人個々の教育思想に関するこれまでの研究では、彼らの思想に西洋の新教育の影響があったことが示されてはきたものの、彼らが受容した新教育情報の具体相は明らかにされてはこなかった。

また、彼らの思想が児童の村の実践にどのように反映されたかまたはされなかったのかという視点からの検討はなされていない。例えば、社の機関誌であった『教育の世紀』に新教育連盟からの影響が色濃くあったことは指摘されていたが、具体的にどのような情報が受容され、または池袋児童の村の実践にまで影響を与えていたのか否かという視点は看過されてきた。また、同人かつ初期の児童の

村の訓導を務めた志垣寛が児童の村教育に果たした役割は、先行研究では看過され過小に評価されてきた。彼は開校二年目にロシアへ海外視察に赴いているが、その中で志垣が得た見聞が池袋児童の村実践に反映されたか否かを考察することは、同時代の国際新教育運動史に池袋児童の村を位置づける上でも重要な鍵となるであろう。著作や雑誌といった文字媒体からの新教育情報の受容だけでなく、情報と直接的に接する海外視察の内実を明らかにすることは、特に野口、志垣における受容実態を考察する上で有効な視点と目される。

このように個々の人物の教育思想の形成過程を明らかにしたうえで、次のステップとして必要となるのは、人々の交流による教育実践⁵⁹⁾への影響を考慮するような研究であると筆者は考えている。確かに、従来の研究では社同人と児童の村教師たちとの「連続性や発展性の見地から」の分析がおこなわれてきた。けれども、それらの分析は一方からもう一方への影響のあり方の分析に偏していたのではなかろうか。両者の交流による思想の循環とでも言うべき営為にも考察を深める材料が隠されている可能性があるのではないだろうか。この疑問に関して、久木幸男「野口援太郎と近藤純悟」⁶⁰⁾で行なわれた、野口の人的交流関係に主眼をおいての検討が示唆的である。ここでは特に、野口と近藤純悟との交渉から両者の教育実践への相互影響が考察されている。野口が児童の村の校長を務める以前の姫路師範学校長在職中に、師範生徒に対し自らの提唱で発足した「精神修養会」を介し、深い交渉を持つことになったのが、清沢満之の門下で、当時私立姫路高等女学校長であった近藤であったという。姫路師範校長時代の野口の実践基底には、ドモラン的「英国流自由教育」思想と、特定ではない「無色の宗教」に対する信念とが存在したが、指導の行き詰まりを感じるうち、後者に疑問を感じ始めたことが、「精神修養会」での信念の再検討につながったと久木は見ている。そして、そこでは清沢-近藤の思想との接近が見られたものの、野口の「自治自修」ないし「自由主義」は、教授の自由のいまだ見出されていない「限界つきの」ものであったと分析された⁶¹⁾。

教育が人によってなされるものである以上、このような人的交流の中から生まれいずるものや、変容していくものを見過ごすことはできない。久木が試みたように人的交流に着目し、池袋児童の村においては例えば社同人野口と教師野村がどのような交流を持ち、それによって野村の実践にどのような影響があったのかを検討することで、野村の教育思想の形成過程をより細かく分析することができよう。

さらには、同人らの教育思想が児童の村構想当初から大きな相違を孕んでいたものであったこと、それが児童の村を短命に終わらせる原因にもなったことはしばしば指摘されてきたが、池袋児童の村が彼ら4人によって創設されたものである以上、彼らの教育思想における共通点をその中で明確にさせておくことが必要である。前掲の宇佐美論文の指摘にもあったように、同人らの教育理念を個々に分析してきた先行研究の成果をふまえ、補足しつつ、今一度同人らの児童の村構想の共通点・妥協点を見いだすべきだと考えられる。

そしてまた、池袋児童の村の実践研究もさらに展開される必要がある。先行研究では児童の村の実践は、自由教育、生活教育、という概念を用いて説明されてきたが、これらの概念の共通理解が不十分なため、同じ教育実践が全く異なる解釈をもたらしていることもあり、実践そのものに対する評価も曖昧なままである。実践の側から同人と野村との個人的な影響関係や交流といった問題性にも注目して教育実践に至るプロセスを解明していく研究も必要である。その際にどのような史(資)料をいかに用いることが実践研究に対して有効であるのかを考慮することも重要な課題の一つになると言えよう。筆者は、野村の教育実践が、同人らが構想していた教育理念といかなる共通点や相違点を持つものであったかを比較することで、池袋児童の村における教育理念と実践との乖離または一致を示し得るものと考えている。

例えば、野口と新教育連盟との関わりを明らかにしつつ、その野口との交渉から野村が国際新教育

池袋児童の村小学校研究の一視角

運動の理念および新教育法に、どう接近したかをより具体的に示すことに主眼を置き、それを踏まえた上で野口と野村の交流にも注目することは、一個人の人物研究では見出せない教育実践を支えた理念や、教育実践に至るプロセスで変遷する教育思想が浮き彫りになるものと目される。

上記のような作業を進展させていくことが、将来的には、世界的な新教育運動の潮流の中に日本の新教育運動の一事例として児童の村を位置づけるという視野の拡大へもつながるものと考えられる。

<註>

- 1) 梅根悟『改訂増補新教育への道』誠文堂新光社、1951年（『梅根悟教育著作選集2』明治図書、1977年所収、256頁）。
- 2) 中野光『改訂増補大正デモクラシーと教育』新評論、1990年、119頁。
- 3) 中野光・高野源治・川口幸宏『児童の村小学校』黎明書房、1980年、2頁。
- 4) 教育の世紀社の実験学校として構想された「児童の村」は当初、全国設置予定であり、池袋児童の村はその第一校目にあたるものであった。実際には、兵庫県芦屋（御影）、神奈川県茅ヶ崎雲雀ヶ岡を含め3校の設置にとどまった。ほかに池袋より分かれた東京児童の村（目白学園）小学校がある。なお、これらを対象とした先行研究については、紙数の都合上省かざるを得ないため本稿ではふれないが、例えば次のようなものがある。永田守「蘆屋児童の村小学校における教育実践に関する研究——桜井祐男における児童中心主義教育の意義と限界——」『関西教育学会紀要』第23号、1999年、111-115頁。浅井幸子「桜井祐男における「自己」の追求とその挫折——芦屋児童の村小学校の教育実験——」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第38号、1998年、307-316頁。
- 5) 山名淳「序章研究の課題と分析視点」山崎洋子・山名淳・宮本健市郎・渡邊隆信・平野正久『新教育運動における「共同体」形成論の出現と「学級」概念の変容に関する比較的研究』平成11年度—平成13年度文部省科学研究費基盤研究（C）（1）課題番号11610280、2002年3月、9頁。
- 6) 館かおる「児童の村小学校」、民間教育史料研究会・太田堯・中内敏夫編『民間教育史研究事典』評論社、1975年、291頁。
- 7) 中内敏夫『「教育の世紀」』、同上書、234-235頁。
- 8) 民間教育史料研究会、中内敏夫・田嶋一・橋本紀子『教育の世紀社の総合的研究』一光社、1984年。
- 9) また、翌年出版された木戸若雄『大正時代の教育ジャーナリズム』（玉川出版）の中でも、教育の世紀社の機関誌『教育の世紀』が取り上げられた。
- 10) 同上書、1頁。
- 11) 森川輝紀（書評）「民間教育史料研究会、中内敏夫・田嶋一・橋本紀子『教育の世紀社の総合的研究』」『教育学研究』第52巻第3号、1985年、85-86頁。
- 12) 同上論文、85頁。
- 13) 田嶋一「教育の世紀社と国際新教育運動」（前掲『総合的研究』第5章、625-641頁）。
- 14) 例えば、『教育の世紀』に多くの記事が訳出されることとなった新教育連盟の英語版機関誌The New Eraでもタゴールの学校に関する記事がある。社の同人野口援太郎はこのThe New Eraの定期購読者であった。
- 15) 橋本紀子「野口援太郎の生活史」（前掲『総合的研究』第1章第2節1、43-56頁）。
- 16) 橋本紀子「姫路師範学校の経営とその卒業生の生活史」（前掲『総合的研究』第2章第1節、79-102頁）。
- 17) 同上書、100頁。
- 18) 大井令雄『日本の「新教育」思想——野口援太郎を中心に——』勁草書房、1984年。
- 19) 同上書、まえがきii頁。
- 20) 中野光『改訂増補大正デモクラシーの教育1920年代の教育』新評論、1990年。
- 21) また、山崎裕二「第一次大戦後における『国際教育運動』の成立と展開——大正期教育改造運動の国際主義的側面——」（『教育研究』第30号、1986年、71-97頁）は、啓明会による国際連盟への国際教育会議

- 開催要求を契機とする「国際教育運動」の成立と展開の様相を構造的に把握することに重点が置かれた。ここでは、国際教育協会の設立過程が中心に描かれているが、その周辺団体として「教育擁護同盟」、「教育の世紀社」、「帝国教育会」の教育団体の活動が記される中で、野口についての言及がある。
- 22) 山崎洋子による研究のうち、特に新教育連盟やエンソアに関しては、以下の研究がある。
 「新教育連盟へのエンソアの途——初期エンソアの活動をてがかりに——」『教育新世界』No. 38、1995年。「ベアトリス・エンソアと新教育連盟——1919-32年の活動をてがかりに——」『教育学研究』第63巻4号、1996年。「『教育の新理想』と新教育連盟に関する考察——1920年代イギリス新教育運動の実態解明に向けて——」『日本の教育史学』第41集、1998年。「新教育連盟に関する覚書（1）——英語版機関紙（Jan. 1920-Apr. 1930）を中心に——」『教育新世界』No. 45、1999年。「イギリス新教育運動の諸思潮とネットワーク」『教育新世界』No. 48、2000年。「イギリス新教育における「教育の新理想」運動に関する研究（I）——揺籃期・興隆期・発展期を中心に——」『鳴門教育大学研究紀要・教育科学編』第15巻、2000年。「イギリス新教育における「教育の新理想」運動に関する研究（II）——低迷期・衰退期を中心に——」『鳴門教育大学研究紀要・教育科学編』第16巻、2001年。「ベアトリス・エンソアの「新学校」構想——ユートピア小説"School of To-morrow"（1925）における学校改革論——」『鳴門教育大学研究紀要・教育科学編』第17巻、2002年。
- 23) Boyd William and Wyatt Rawson. *The Story of the New Education*. London: Heinemann, 1965. なお、邦訳は『世界新教育史』として、国際新教育協会訳で玉川大学出版部より1966年に出版されている。
- 24) 竹田宏子「野口援太郎によるモンテッソーリ教育法の受容と実践」『広島大学教育学部紀要第一部（教育学）』第43号、1994年。竹田は1914（大正3）年の欧米視察から姫路師範学校を去る1919（大正8）年までの野口によるモンテッソーリ教育法の受容過程とその実践の具体相を明らかにした。
- 25) 橋本紀子による『男女共学制の史的研究』大月書店、1992年。
- 26) 同上書、216頁。
- 27) 宇野美恵子『教育の復権——大正自由主義教育と自己超越の契機』国際書院、1990年。
- 28) 同上書、58頁。
- 29) 海老原治善「民間教育運動の発展」海後勝雄・広岡克蔵編『近代教育史Ⅲ』誠文堂新光社、1956年、258-280頁。
- 30) 竹内常一「解説」『野村芳兵衛著作集3 生活訓練と道徳教育』黎明書房、1973年、410-438頁。
- 31) 磯田一雄「野村芳兵衛の生活教育思想」『教育学研究』第34巻1号、1967年、59-67頁。
- 32) 中野光「日本の新学校の教師像」『日本教師教育学会年報』第6号、1997年、24頁。
- 33) 宮坂哲文「宮坂哲文氏病中日記」『生活指導』73号、1965年。
- 34) 磯田前掲論文（註31に同じ）、59頁。
- 35) 布村志保「野村芳兵衛における「自然」概念形成過程（2）」『立教大学教育学科年報』44号、2000年、55-70頁。
- 36) 小林善彦「ルソーと「自然にかえれ」について」『外国語科研究紀要』33巻2号、1985年によれば、ルソーは全作品のなかで「自然にかえれ」とは、一度も記しておらず、この言葉は日本独自のルソー理解に基づいているとされる。
- 37) 同上論文、58頁。
- 38) 布村前掲論文（註35に同じ）、60頁。
- 39) 布村同上論文（註35に同じ）、68頁。
- 40) 宇野美恵子「大正自由教育における野村芳兵衛の思想——1920年代の「新教育」における「生活世界」の哲学——」『フェリス女学院大学文学部紀要』34号、1999年、103-123頁。
- 41) 宇野がここで、ハイデルベルク会議へと論を進めるのは、児童の村と国際的な新教育運動との関わりを踏まえてのことである。しかし、その記述には事実の誤認と思われる部分があるので指摘しておく。まず、「野口援太郎は、B. エンソアが同志とともに1915年に設立した国際教育協会に関し、1922年に日本国

池袋児童の村小学校研究の一視角

- 際教育協会委員に就任して」という箇所では、エンソアが新教育連盟を創設したのは1921年である。おそらく、日本では帝国教育会との関係があった別団体である国際教育協会との混同がある。また、「野村が「児童の村」に着任したその同じ年の1925年には、ハイデルベルク第三回国際教育会議が開催され」とある箇所については、野村の着任は1924年である。
- 42) 今井康雄「野村芳兵衛における「教育意識」否定の論理——「教育意識」の否定から「自然の組織化」へ——」『広島大学教育学部紀要 第一部』第35号、1986年、1-8頁。ここで今井は、第一次新教育運動が日本においても欧米においてもく作る」という教育態度を核に形成された近代的な教育システムにく鼓舞する」という態度を対置したという側面を備えていた可能性を仮定し、それを野村の思想の中に読み解くことを求めた。そして「教育においてく鼓舞する」ことを否定することなくく作る」ことを可能にすることをめざした野村の試みが「同時代の国際的な新教育運動（たとえばドイツの「改造教育学」）と課題を共有する」ものとした。
- 43) 浅井幸子「野村芳兵衛の一人称の語りとその変容——実践記録の記述を中心に——」『教育学研究』第66巻第2号、1999年、21-30頁。
- 44) 浅井幸子「教育の世紀社による「児童の村」構想の成立過程——教育擁護同盟の運動を中心に——」『日本教育史研究』第19号、2000年、31-52頁。
- 45) 清水康幸「論評」『日本教育史研究』第19号、2000年、53-55頁。
- 46) 多田建次・多田廣子『異文化摂取と教育改革』玉川大学出版部、1995年、154頁。
- 47) 駒込武「野村芳兵衛による「修身教育」の実践——社会認識と共感の形成をめぐる——」『教育方法学研究』4集、1992年、23-41頁。
- 48) 井上潔『論争・教育運動史』草土文化、1981年、44頁。
- 49) 鶴見俊輔、久野収『日本の思想』岩波書店、1956年、114頁。
- 50) 前掲駒込論文、(註47に同じ)、24頁。
- 51) 狩野浩二「「生活」と学習の結合に関する教育実践の研究——野村芳兵衛の実践を中心に——」『教育論集』第4号、宮城教育大学大学院学校教育講座、1993年、151-200頁。狩野は「教育実践におけるく生活学習」の展開——野村芳兵衛の実践く1936—を通して——」『沖縄国際短期大学大学部記念論集』1997年、165-175頁、「池袋児童の村小学校における「生活」カリキュラムの創造」『教育目標・評価学会紀要』1999年、13-21頁においても野村を研究対象にしている。
- 52) 君塚仁彦「池袋児童の村小学校における「学校博物館」活動——博物館学の視点から見たその意義——」『東京学芸大学紀要』1部門第49号、1998年、13-25頁。
- 53) 谷口雅子「戦前日本における教育実践史研究 IVの2——社会認識教育を中心として（私立児童の村小学校における実践）——」『福岡教育大学紀要』第49巻、第2分冊、2000年、145-166頁。
- 54) 富村誠「生活科「遊び」活動論の歴史的研究（V）——明治後期「遊戯」活動論の大正新教育期・小学校における実践化（1）——」『京都女子大学教育学科紀要』42、2002年、57-66頁。
- 55) 水崎富美「野村芳兵衛の「訓練」と教科外活動の実践——教育課程づくりへの子ども参加と相互評価——」『東京大学大学院教育学研究科 教育学研究室紀要』第28号、2002年、53-63頁。
- 56) 同上論文、53頁。
- 57) 前掲谷口論文、(註53に同じ)、155頁。
- 58) 館かおる「書評 中野光・高野源治・川口幸宏『児童の村小学校』」『教育学研究』第47巻第3号、1980年9月、62頁。
- 59) 「教育実践」という概念の歴史については、前田一男『「教育実践」史研究ノート—言葉の歴史をめぐる—』『大東文化大学紀要』第29号、1991年や、民間教育史料研究会・大田堯・中内敏夫編『民間教育史研究事典』評論社、1975年を参照。
- 60) 久木幸男「野口援太郎と近藤純悟」『横浜国立大学教育紀要』11集、1971年、65-83頁。
- 61) 同上論文、65-83頁。

